

平成31年2月14日

各位

公益財団法人 大山健康財団
理事長 神谷 茂

平成30年度「第45回大山健康財団賞」、「大山激励賞」及び「第1回竹内勤記念国際賞」受賞者並びに「第45回学術研究助成金」受贈者決定のお知らせ

大山健康財団は、このほど平成30年度の「第45回大山健康財団賞」、「大山激励賞」及び新しく創設された「竹内勤記念国際賞」受賞者各1名、並びに「第45回学術研究助成金」受贈者10名を下記の通り決定しました。

「大山健康財団賞」は、発展途上国で長年医療協力を尽くし、特に感染症対策に尽力した医療関係者に賞状、記念メダル、副賞を贈呈するもので、「大山激励賞」は、発展途上国で短期間ながら医療協力を尽くし、特に感染症対策に尽力した医療関係者で、今後とも発展途上国においてなお一層の活躍が期待される方に賞状及び副賞を贈呈するものであります。

「竹内勤記念国際賞」は、故竹内勤前理事長の遺徳を永く記念するため、竹内令夫人からの私財寄附により平成30年度に新しく創設されたもので、発展途上国において長年、熱帯医学、寄生虫学の研究に貢献し、今後とも大いに活躍が期待される若手の研究者に賞状及び副賞を贈呈するものであります。

また、「学術研究助成金」は、大学、研究所、病院などにおいて、感染症（一般細菌感染症、ハンセン病、リケッチア症、寄生虫病）に関する基礎的あるいは臨床的研究及び疫学的研究に従事されている若手研究者より申請のあった研究課題の中から選考された研究課題に対し助成金を贈呈するものであります。

なお、贈呈式は平成31年3月14日（木）午前11時30分から霞が関ビル35階霞ヶ関東海倶楽部（東京都千代田区霞が関3-2-5）で各賞並びに助成金併せて執り行います。

記

平成30年度「第45回大山健康財団賞」

（敬称略）

【受賞者】 さわだ たかし
沢田 貴志 ☆（認定）特定非営利活動法人
シェア＝国際保健協力市民の会 副理事長
☆神奈川県勤労者医療生活協同組合港町診療所 所長
◇医師 （満58歳）

【業績内容】

沢田貴志氏は、医学部卒業後、一般内科医としての研鑽、診療の傍ら、民間組織（特にシェア＝国際保健協力市民の会）のボランティア活動に参加、特に社会的弱者を対象にした診療、国際協力を行ってこられた。長年にわたり、主にNGOを通じ日本と途上国にまたがる感染症対策の課題を中心に活動を展開されてきた。在日外国人への医療支援とその研究活動では、貴重な働きを継続され、結核とエイズに関しては、他に類を見ない働きをされ、多くの医療関係誌にその発信もされている。結核予防会の外国人相談事業でも、来日後発症した外国人結核患者の医療に関し、20年以上にわたり、講習会等

での講師、アドバイザー、機関誌への寄稿などの貢献をされ、結核病学会をはじめ諸学会でも外国人医療に関する貴重な学術的発表を続けられている。常に民間人の立場で、弱者の立場に立ち、地道にかつ献身的な働きをされる姿勢は、行政機関を含む多方面から信頼と尊敬を受けておられる。また4つの大学で、国際保健学や外国人医療に関する講義を担当、人材育成にも尽力、最近では外国人医療相談・医療通訳に関するテキスト編纂にも関わり、実践と学術のバランスを兼ね備えて仕事をされる貴重な存在となっている。

1991年、フィリピン・ピナツボ火山噴火後スラムに入り、現地NGOや住民と連携し、医療を受けられず多くの人たちが命を落とす現場で活躍された。現地ソーシャルワーカーの「世界は繋がっている。あなた達が日本に公正な社会を作らないといつまでもフィリピン社会は影響を受け続ける」という言葉に衝撃を受け、帰国後、病院で門前払いを受けて命を落とす外国人の実態を見て覚悟を決め、シェアが開始した在日外国人の健康支援活動に参加された。以来医師・理事として中心的役割を担い25年以上無料健康相談・結核検診やエイズ・結核患者の相談対応に尽力されてきた。1991年外国人を含む社会的弱者に寄り添う「港町診療所」に入職し、2006年より所長を務められている。シェアのタイでのHIV陽性者支援に理事として25年携わり、タイ王国大使館名誉医療アドバイザーとして在日タイ人の医療支援を15年行われている。また、「MICかながわ」理事として医療通訳育成に15年以上尽力され、東京都の先駆的取組み「結核患者治療服薬支援員（通訳）養成・派遣事業」には開始時から10年以上協力され、外国人医療・医療通訳に関するテキストも発行されている。

平成30年度「大山激励賞」

(敬称略)

【受賞者】 くもん かずこ
公文 和子 ☆ケニアの障がい児療育事業「シロアムの園」代表
◇医師（小児科） 医学博士 （満50歳）

【業績内容】

公文和子氏は、もともとは小児科医を目指していた北海道大学時代に、NGOが主催したスタディツアーでバングラデシュを訪れたとき、現地で出会った子どもたちのきらきらした目を見て、自分が生涯を捧げるのはこの子たちだと直感されたことから、これから本格的に医師として活躍して欲しいという周囲の反対を押し切って、医局を離れる決断をされた。

その後、イギリス・リバプールで熱帯小児医学を学ばれ、先ず行ったのがシエラレオネで、難民キャンプにある国立病院に派遣されたが、2か月で体調を崩してしまい、最後はウイルス性出血熱などの疑いでドイツ・ハンブルクの病院に緊急搬送されてしまい、しばらくは挫折を感じ先が見えなくなったという。

その後、JICAのプロジェクトでケニアに行き、最初はHIV分野の研究所の人材の育成、コミュニティや医療施設におけるマラリア・HIV・結核対策、日本政府とケニア国保健分野への協力・他ドナーとの調整、保健システム強化などに取り組まれていたが、7年ほど過ぎたころ、もっと助けを必要としている子どもたちがいるのではないかという疑問が湧いてきて、この頃から障がい児に関わるようになる。

公文和子氏が最も力を入れられていたのは、チャイルドドクターというケニアにあるNGOで、スラムで巡回診療をする小児科医として10年近く活動されている。その中から、テレビの取材で知り合った歌手のさだまさしさんが設立した「風に立つライオン基金」の協力もあり、2015年にケニアに障がい児とその家族に対する療育支援を

行う施設「シロアムの園」を創立された。

ケニアは現在、高度経済成長で、効率性や生産性が重視され、これまで守られてきた弱者に目が行かなくなり、国のセーフティーネットも不十分で、障がいのある子どもたちへの満足な医療や教育も受けられない状況となっている。ケニアで障がい児が増える主な原因は分娩時にケアが足りないことにある。適切なタイミングで帝王切開を受けられなかったり出産直後の黄疸の処置が悪かったりしたことで障がいが残る子どもたちが増えている。

社会的な弱者の権利擁護を進める「アドボカシー」という考え方があるが、障がいのある子どもを持つ家族が声をあげ、必要な医療や教育を受けたり、差別や偏見が減り、必要以上に気を遣わないで生きていける社会を夢見て、公文氏は日夜尽力されている。

平成 30 年度「第 1 回竹内勤記念国際賞」

(敬称略)

【受賞者】 ^{いわがみ}石上 ^{もりとし}盛敏 ☆国立研究開発法人国立国際医療研究センター研究所
熱帯医学・マラリア研究部
上級研究員 医学博士 (満 46 歳)

【業績内容】

石上盛敏氏は、学部学生時代から現在に至るまで一貫して、発展途上国で熱帯医学、特に寄生虫症の分子遺伝疫学研究を行い着実な成果をあげてこられた。その研究スタイルは常に現地の研究者らと共に、時に寄生虫症の流行地域住民の目線に立ち、フィールド調査を実施し、各種データ及び検体を採取し、それらをラボで分析して対策につながるエビデンスを提供するというものである。2014 年からは国立国際医療研究センター (NCGM) 海外研究拠点の一つであるラオス国立パスツール研究所 (IPL) に常駐され、マラリア、メコン住血吸虫症、及びタイ肝吸虫症の研究と対策をラオス保健省並びに WHO と共に実施されている。また研究と対策の他に、ラオス人若手研究者、並びに現地医療従事者の人材育成も精力的に行われている。これらの取り組みは、熱帯医学のあるべきオーソドックスな姿勢を顕示していると言えると共に、今後とも大いに活躍が期待される。

1997 年から 2004 年の学生時代は、アジア諸国、並びに中南米諸国に流行する肺吸虫症、住血吸虫症、シャーガス病等のフィールド調査とラボワークを実施され、上記寄生虫症の感染率、分布状況、並びに DNA 塩基配列に基づく分子系統分類を実施されてきた。スリランカでは肺吸虫の中間宿主貝の同定を初めて行われ、2004 年から NCGM 研究所に所属し、フィリピン、韓国、東南アジア諸国のマラリアのフィールド調査とラボワークを実施し、薬剤耐性マラリアの分布状況、並びにマラリア原虫集団の伝搬動態を明らかにされた。2014 年から現在に至るまで、JICA/AMED SATREPS プロジェクトの一環として、IPL 並びにラオス保健省と共に同国のマラリア、及び重要寄生虫疾患の研究・対策・人材育成を実施されている。同国における大規模マラリア・フィールド調査により、無症候性キャリアーの発見、アルテミシニン耐性マラリアの拡散状況の詳細な把握、並びにサルマラリア原虫のヒト感染症例をラオスで初めて報告された。さらに寄生虫症の診断技術の開発も行われ、また 2017 年からは WHO のテンポラリーアドバイザーとして、マラリア、並びにメコン住血吸虫症の WHO の地域対策会議での助言も行われている。

平成30年度「第45回学術研究助成金」受贈者

(敬称略)

| 氏名 | 所属・役職 | 研究課題 | 助成額(円) | 選考分野 |
|---------------------|--|---|--------|------|
| いのうえ しんいち 井上 信一 | 長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 准教授 | 三日熱マラリアの重症化における自然免疫様細胞 $\gamma\delta$ T細胞の役割の解明 | 100万 | 寄生虫学 |
| きんじょう ゆうき 金城 雄樹 | 東京慈恵会医科大学 細菌学講座 主任教授 | バイオフィーム形成機構の解明及び制御法の開発 | 100万 | 細菌学 |
| さいとう りょういち 齋藤 良一 | 東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 分子病原体検査学分野 准教授 | ガーナ共和国における下痢原性大腸菌の分子疫学研究 | 100万 | 細菌学 |
| しんざわ なおあき 新澤 直明 | 東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 助教 | 転写因子の網羅的標的遺伝子解析に基づくマラリア原虫赤血球侵入機構の解明 | 100万 | 寄生虫学 |
| たちばなしんいちろう 橘 真一郎 | 順天堂大学医学部 助教 | 薬剤耐性マラリアの地域特異的な出現を規定するゲノム基盤の解明 | 100万 | 寄生虫学 |
| ちゅう よんじん 邱 永晋 | 北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター ザンビア拠点部門 博士研究員 | ザンビアにおける新規ヒト病原性回帰熱ボレリア“ <i>Borrelia fainii</i> ”の浸淫調査 | 100万 | 細菌学 |
| にしむら ともやす 西村 知泰 | 慶應義塾大学 保健管理センター 専任講師 | 肺MAC症の病態におけるホルモンの役割 | 100万 | 細菌学 |
| はしもと むねあき 橋本 宗明 | 産業技術総合研究所 健康工学研究部門 主任研究員 | マラリア撲滅に向けた全自動診断装置の高機能化とその実証試験 | 100万 | 寄生虫学 |
| むらせ ちあき 村瀬 千晶 | 名古屋大学大学院 医学系研究科皮膚科学分野 大学院生 | アフリカ諸国における顧みられない熱帯皮膚病のマイクロバイオーム解析 | 100万 | 細菌学 |
| やまもと よしなり 山本 祥也 | 広島大学大学院 生物圏科学研究科 助教 | 母子免疫を利用したオリゴDNA ナノカプセルの自由摂取による新生児の感染防御機能の増強効果の検証 | 100万 | 細菌学 |
| | | | 1,000万 | |

お問合せ先：公益財団法人 大山健康財団 事務局

〒132-0035 東京都江戸川区平井5-29-4-202

電話 03-3614-7762

以上